

見送り幕は16世紀のタペストリー

ほうおう
おうざん
鳳凰山
(祝町組)



▲亭の屋根にシンボルの鳳凰



▲見送り幕のレプリカを自店に飾る藤澤さん



▲一番の自慢はベルギー製の見送り幕



▲華やかな舞台の格天井



▲大虹梁の鋳金具「鶴の巣ごもり」

舞台は吹き寄せ格天井

絢爛豪華な装飾品をまとう曳山の山車は動く美術館と言われるが、鳳凰山の装飾で一番の見どころは、山車の背後を飾る、ひと際大きくて美しい見送り幕。長浜の曳山の中で最も古のもので、16世紀にベルギーで制作されたゴブラン織。どのような経緯で日本にやってきたのか、詳細はさだかではない。ただ幸運なことに、祝町組にはこの幕を購入した際の「売買証文」が現存し、「文化14年(1817)3月8日魚屋町組(鳳凰山)が200両で購入した」(みくろな83号曳博通信より)ことが判明している。

この見送り幕は、トロイア戦争(ギリシア神話)を題材に制作された5枚連作のタペストリーの中の1枚を切断し、その一部を再縫製したもので、祇園祭の鶏鉾の見送り幕などと共に、本来は1枚の作品であった。金糸銀糸を用いて「妃アンドロマケと侍女」が描かれており、カラフルで手の込んだ、職人技が光る重厚な織物は圧巻。再縫製する際、オリジナルの図柄が描き加えられている部分にも注目してほしい。現在、この見送り幕は、貴重な工芸品として国の重要文化財に指定されている。

鳳凰山は、文化15年(1818)に田山を焼失したあと、再建資金を集めながら木材の購入、設計等を行い、文政12年(1829)に再建完成した。見送り幕は別の場所で保管

されていたため、焼失を免れた。

再建の際の模型製作が藤岡甚平、大工が藤岡和泉。格天井を吹き寄せにするのは、長浜では鳳凰山のみで珍しい。亭の上に木彫の鳳凰を飾り、舞台障子上の大虹梁の装飾「鶴の巣ごもり」や前柱の「鶏」、台輪の彫金「浪に竜」の装飾などの見どころがある。

ゴブランのレプリカを常設展示

自身の店舗でも、ベルギー製ゴブラン織の商品などを扱う、ゴブランギャラリー「ロココ」の藤澤康行さんに話を聞いた。山組では、総当番副委員長を経験し、前負担人。現在は中老の立場で山組に関わる。

「竜の装飾は浮き出ているように立体感があり素晴らしいし、鶴が子育てしている様子もかわいらしいと思います。そんななか、ぜひ見ていただきたいのは見送り幕ですね」と、我がヤマの魅力を語る藤澤さん。

ロココ店内には、4分の1のレプリカが展示されている。

「本場ベルギーの職人に、私費で制作を依頼しました。祭り以外のシーズンに店に来ていただくお客さんにも、素晴らしい見送り幕を感じていただければと思います」と話している。

(千)

曳山修理職人に聞く

銑金具や漆の修理、解体や組み立てに関わる職人さんに曳山への思いをつかかった。

曳山の技術からオリジナル作品づくりへ

銑金具師 辻清さん（長浜市南貝服町）

辻清さん（83歳）は、明治30年創業の金泉堂3代目。浜仏壇の金具製作のかたわら、長浜の曳山13基のうち10基の銑金具の修理を担当してきた。

解体修理では、まず、欠けた箇所などを確認しながら、すべての金具をはずす。その数は「さあ、どれくらいになるのでしょうか」と辻さんも言うほど夥しい。それらを正確に元に戻すために、辻さんは、実物大に引き伸ばした写真や拓本で作った型紙を用意している。はずした金具は、ひとつひとつの汚れを落とすたあと、傷みを修繕する。銑金具には、制作年代や作者などによって特徴があるので、欠損部を補作するときは、それぞれ、当時の彫金技法や鍍金技法に合わせて復元するように努めているという。さらに、周りの金具の時代色とのバランスを考えて古色付けをして仕上げる。また、修理後の曳山の初出番の後には、曳行による振動で金具の取り付けに緩みが出ていないか、辻さんはかならず確認している。

修理に携わっていると、愛知郡湖東町

（現東近江市）出身の金工師・奥村晋次の一統や、国友鉄砲鍛冶の系譜を引く藍水堂

一徳といった当世一流の職人の高い技術を目にする機会にもめぐまれる。たとえば、萬歳樓前柱の「高砂の尉と姥」の髪の毛や眼玉、孔雀山大虹梁の5羽のハト（いずれも奥村晋次作）などには、異なる色の金属が使われ、立体感を増幅している。これは「色絵象嵌金物」といい、金、銀、銅の合金比率によって黒さや白味が調整された色を作り出している。

辻さんはこの方法に心惹かれ、60歳を過ぎて本格的に取り組むようになった。（公社）日本工芸会の正会員に認定されたのは平成9年、66歳のこと。その高い技術は、春日大社の神宝類のひとつ「八足案」（神饌を備える台）にも生かされている。

「たくさんの先輩方の作品に接して学んだことを曳山に反映できるのはありがたい。長浜に曳山という文化があったおかげです」と辻さん。今も独特の作品づくりに意欲的だ。（メイ）



▲孔雀山の台輪に修理した銑金具を打ち付ける辻さん



▲犬山の曳山を修理する渡邊さん

曳山と仏壇の工芸技術を次代へ

塗師 渡邊嘉久さん（長浜市三ツ矢元町）

湖北地域に見られる伝統的な仏壇を浜壇という。浜壇は、長浜の曳山と深く関わっている。どちらも、江戸期に長浜の町で栄えた藤岡和泉という職人の一門がルーツである（44頁参照）。

仏壇七職といわれるように、一般的に仏壇の仕事は七種類の職人で構成されるが、浜壇は塗師が元請となつて仏壇店を構える。漆塗りや金箔押しといった塗師の仕事をおこなうとともに、木地師や木彫師、銑金具師、蒔絵師の仕事を取りまとめる。

渡邊嘉久さん（52歳）は浜壇の塗師である。だが仕事はそれだけにとどまらない。「渡邊美術工芸」という株式会社を立ち上げ、漆に関わる様々な分野に手を広げている。

長浜の曳山は、これまで8基の修理が終わり、いまは9基目の孔雀山が修理中だ。渡邊さんは、そのうち5基を手がけている。さらには米原や犬山など、他の町の曳山の修理にも携わっている。

修理の手法は日々進化しているという。職人はもちろん、修理を審査・指導する専門委員や市の文化財担当者も、修理を経る

ごとに知識や技術が蓄積されていく。経験的に、現状の外観を大きく変えずに、美しさと耐久性を兼ね備えた修理の仕方を身に付ける。

例えば曳山の屋根の色を決める際、黒漆とベンガラと朱漆の配合の割合を微妙に変えた色見本を幾つも作り、修理委員会で議論を重ねる。また、漆を塗り直す所と塗らない所のバランスがくずれないように、様々な漆塗りの手法を駆使する。同じ文化財であっても、曳山は美術品と異なり実際に屋外で祭りに使うものだ。したがって、その環境に耐える塗りを施さねばならない。漆塗りの仕事は奥が深い。渡邊さんは、全国の工芸展などに乾漆の器作品を出品している。自らの技術向上のためである。長浜八幡宮の近くに、「八草」というギャラリーも開設している。湖北には、仏壇の製造をベースにした金工や木彫、漆などの工芸が引き継がれている。これらの技を魅力のある分野に生かして、次代へ伝えていきたいという。

（西岳人）